

中日新聞「リンクト」
LINKED
plus+
明日への
挑戦者

安城更生病院、 決意と覚悟。

病院ビジョン特集

愛知県厚生農業協同組合連合会
安城更生病院

企画制作○中日新聞広告局 編集○プロジェクトリンクト事務局



これからの超高齢社会。 病院同士でこれまで培った 阿吽の呼吸を可視化する。

世界で類を見ない超高齢社会に突入した我が国。社会保障をはじめ、さまざまな制度の改革が進められている。地域医療もその一つであり、大きな医療変革が迫られている。西三河南部地域において、どういった考え方や方法が必要か、そこでの安城更生病院の役割りを、浦田士郎病院長が語る。

01 CHAPTER 最後の最後は共闘する。 その信頼関係が、 この地域にはある。

—まずは貴院の特色をお教えください。

浦田 西三河南部西医療圏における高度急性期病院として、救急・周産期・がん・災害医療を4本柱に、生命に危険が及ぶ重篤な状態の患者に、専門的で密度の高い集中的な医療・看護を提供しています。診療領域のなかでは循環器・新生児・周産期が特に強いですね。対象とするエリアはどこになりますか。

浦田 高度急性期病院、また、三次救急（救命救急センター）としては、西三河南部、西三河北部の一部、さらには、知多半島の一部まで広域に亘っています。そこでは同じ西三河南部にある刈谷豊田総合病院さん、岡崎市民病院さんと、相互に補完し合う関係にあります。また、二次救急や日常的な診療活動は、安城市内の八千代病院さん、



COLUMN

●安城更生病院の「更生」は、1965年、農山漁村経済更生運動から「甦り」を表す二文字からきており、そこには住民たちの自らの健康は自らで守る、という強い意志があった。1948年には、愛知県厚生農業協同組合連合会に移管され、以来、着実な歩みを重ねる。

●2002年、現在地に移転してより進展めざましく、救命救急センター・総合周産期母子医療センター・地域がん診療連携拠点病院・地域中核災害拠点病院・地域医療支援病院の各指定を次々に受け、名実ともに西三河南部地域の基幹病院となる。

●現在では、安城市における市民病院的な役割、安城碧海地区の中核的病院としての役割、そして、医療従事者の教育機関としての役割、という3つの機能を果たしている。

●そうした（実力病院）となっても、かつて地域の住民たちが、自らの力で勝ち取った医療への精神は受け継がれており、地域医療への真摯な眼差しが絶えることはない。





「例えば、当院が救急車を年間2万台も受け入れるのは、どうしたって無理なんです」と、浦田病院長は言う。

「地域において、安城更生病院だけが順風であることはあり得ない。地域の医療機関の総和が、何より大切です」。



西尾市民病院さん、碧南市民病院さんと連携し、責任医療圏として守っています。

「昔から「三河の病院は仲が良い」といわれますが、まさにそのとおりですね。」

浦田 西三河南部は人口がずっと増え続け、その地域の発展とともに、病院も発展してきました。どんどん増え続ける地域住民を守るために、地域の病院みんなで、一所懸命支え合ってきた歴史があるんです。互いに競争心はありませんが、最後の最後は共闘します。地域医療を守るという一点で信頼関係が結ばれ、阿吽の呼吸で意思疎通ができています。

「そうした風土を持つ地域において、厚生労働省が将来を見つめて描いた地域医療体制、すなわち、病院の入院機能（病床）を（高度急性期・急性期・回復期・慢性期）の4種類に分けること、そして、人口構造や疾病構造の変化をもとに割り出した、二次医療圏ごとの病床数について、どのようにお考えですか。」

浦田 地域医療構想（バックステージ参照）ですね。入院機能の分化はともかく、病床数は、目安だととらえています。なぜなら、医療技術は進歩するし、それにより入院日数も変わる。在宅医療も進歩するでしょう。こうした医療の変化も取り込まなくては、本当に必要な病床数は出せません。従って、あの数字に沿って地域の病院を機能分化するという発想ではなく、まず、すべての

病院が今後の地域に必要な医療と一緒に考える。そのためには、情報と認識を共有する。その上で、自院はこの領域なら責任ある医療を提供できるか、みんなが腹を割って話す。それが大切だと考えます。

02 CHAPTER 地域のための推進役。その決意と覚悟が、私たちにあります。

「中規模病院が力を落としていると聞きますが、これをどうお考えですか。」

浦田 それは医師不足が引き金となっていますね。医師教育の仕組み、制度にも関係ありますが、高度急性期病院に医師が集中し、それ以外の病院には医師が集まり難いんです。これが高じると、中規模病院が消えてしまう危険性がある。西三河南部も決して例外ではありません。

「実際にはどのような問題が、地域で起きるのですか。」

浦田 代表例として、救急があります。この地域では、二次救急の多くを中規模の自治体病院が担ってくれています。が、実は救急は不採算領域なのです。それでも救急を守るとなると、少ない医師たちは疲弊し、病院も体力が落ち、赤字体質になってしまふ。救急をはじめ公益性を目的とした医療には、自治体が一般財源から支援していますが、それがずっと続けば、自治体も支え切れなくなるかもしれません。となると、

二次救急の体制が崩れ、搬寄せが三次救急の病院にくる。つまり、地域全体の救急体制が壊れてしまいます。また、高度急性期治療を必要としない、一般的な患者さんを診てくれる病院も崩壊するということです。

— そうした問題を抱え、超高齢社会を乗り切るには、どうしたらよいとお考えですか。

浦田 地域の病院同士が支え合つ、ネットワークの構築です。

— 病院同士の相互扶助ですね。具体的にはどんな協力が考えられますか。

浦田 当院でいえば、医師ですね。今考えられる一つのチャンスとして、2018年4月から新たに始まる専門医の教育

制度があります。当院はその教育の基幹施設ですが、2つの自治体病院が連携施設となっています。この関係を活用しての交流が可能です。もちろん大学医局の理解、協力が必要ですが、地域医療を守るという観点から、大学も含めての人事交流を実現させたいと考えます。また、医師以外の人材の交流、医療資源の共同利用、経営ノウハウの提供など、さまざまな協力が可能だと思います。

— そうしたネットワークの構築・運営には、情報を行き渡らせる、会話を喚起する、その方法を企画するなど、推進役が必要ではありませんか。

浦田 そうですね。それはやれる病院、

やれる人が、担えばよいと考えます。

— 自院だけの利益ではなく、地域のために汗をかく存在ですが、貴院はいかがですか。

浦田 やる病院、人が他にいないなら、当院が担います。当院は、厚生連の病院であり、公的な病院とされています。いわば公と民の中庸、どちらにも偏らず中立的なポジションだといえます。で

BACK STAGE

地域医療構想の策定。 必要なのは全体最適の視点。

● 現在、我が国では、団塊の世代が75歳以上となる2025年を見据え、地域医療体制を革新する「地域医療構想」の策定が進められています。すべての二次医療圏で、地域の病院みんなが協力して現状を見直し、地域医療の再構築を図っていくのだ。

● だが、西三河南部地域は、高齢化は進んでいるが、今なお他地域からの流入により人口が増

すから母体の異なる病院同士の接着剤になれると思っています。民間的な発想や手法も積極的に取り入れてきていますから、推進役としての能力・体力はあると自負しています。地域の皆さんも認めてくださるのではないのでしょうか。西三河南部の医療を絶対に守り切る。そのためなら、当院はどれだけ汗をかく決意と覚悟があります。

加。一般的にいわれる「2025年問題」はこの地域では「2035年問題」である。

● そうした地域の事情を見つめ、浦田病院長は「この地域は、これまで効率的で健全な医療提供ができていました。だから性急にことを進めない。無闇に急いだり、県の権限で強制的に決めるようにすると、今の医療体制全体が崩壊します」と警鐘を鳴らす。そうではなく、「地域における個々の病院の必要性をみんなで確認し、みんなで病院の機能・役割を決めることが大切」。いわば全体最適の視点が必要であると語る。



企画制作

中日新聞広告局

編集協力

愛知県厚生農業協同組合連合会
安城更生病院

〒446-8602

愛知県安城市安城町東広畔28

TEL 0566-75-2111(代表)

FAX 0566-76-4335

<http://www.kosei.anjo.aichi.jp/>

お問い合わせ

中日新聞広告局広告開発部

TEL 052-221-0694

FAX 052-212-0434

プロジェクトリンク事務局

TEL 052-884-7831

FAX 052-884-7833

<http://www.project-linked.jp/>

プロジェクトリンク

検索

LINKED vol.27 タイアップ